

備中高松城下町かわら版

<http://www.takano-okayama-c.ed.jp/>



2月18日(土)に本校農場(畜産科学科)でスーパー・カウ(母親)から生まれた子牛です。記者が訪ねた時はお昼寝をしていました。

【朝礼台】

今年の冬は厳しい寒さが続きました。が、はや、梅の開花の便りが届いています。我家の梅の蕾もだいぶ膨らんでまいりました。梅の花の香りは春を感じさせます。「春告草」とも言われる通り冬の厳しさにじつと耐えながら一輪一輪と蕾をほころばせ馥郁（ふいく）たる香りとともに春の訪れを告げます。松尾芭蕉の弟子服部嵐雪の句に「梅一輪一輪ほどの暖かさ」というのがありますが、梅のつぼみが一輪ほころび、また一輪ほころび、それにつれて少しずつ暖かくなってくる様子が実にうまく表されています。日本には昔から、このように日々の生活の中で自然を感じ、自然を愛し、折々に四季を表現する文化があります。物質的な豊かさや快適さを追い求めてきた結果、季節の移り変わりが損なわれる事態が多くありますが、四季の移り変わりに感謝し、心から慈しむ良き文化は大切にしてほしいものです。

（校長より）

(校長より)

第 18 号

平成18年2月28日

発行元
岡山県立
高松農業高校
tel
086-287-3711
fax
086-287-3713



担い手群像 - 山陽新聞掲載記事から
本校の卒業生が、県下各地で活躍しています。その中で、地域の農業の担い手として注目されているお二人を御紹介します。

。物部徹也さん（37）（写真右）は備中町でビオネ（45a）と水稲（4ha）を作る傍ら、高齢化で農作業が難しくなった近くの農家約30戸から田植え・稲刈りなどを請け負っている。その面積延べ22ha。その中で故郷を守りながら効率的な農業を模索している。彼は、昭和62年本校農業科を卒業後、日本大学・農獣医学部・農学科卒業。

。森安晃司さん（22）（写真左）・備前市・は本校園芸科学科を卒業後、岡山県農業大学校に進学し、卒業後、同級生だったかんなさんと結婚。現在は夫婦で、コマツナを20aのハウスで栽培。コマツナ一作で多いときは800万円の収入がある。将来は法人化を目指している。



【木瀬れい】（町の人お一人に御協力いただきま
した。）
この度卒業される3年生のみなさん。良い高
校生活でしたね。今のやさしい気持ち忘れな
いで、学生として社会人として、これからも頑
張ってください。原古才・女性・Aさん・69才

【放課後】レスリング部・全国高校選抜レスリング中国大会（1/28・倉吉市）・高松農・団体・3人個人では青井政樹君（生理工・工科2年）60 kg級で優勝、時信光一君（農業土木科2年）96 kg級で第2位。3月26・29日、新潟市で開催の選抜大会へ、団体・個人で出場権を得る。



本校のスポーツ工主キ
スパートとしてラグビー
部員を前に讃義する
植葉大輔先生(川崎医療
福祉大学健康科学専攻
博士課程大学院生)は
はラグビーの名校・皆
光学園3年の時に、大
府大で優勝、花園で
位の経歴を持つ。この日
は実技の前に、理論を勉
強、冬の寒い日であつた
が、生徒の真剣さに、ラ
グビーの楽しさを教え
てくれた。



岡山県トップアスリート賞の表彰式（2月20日）で、レスリングで本校の楢畑翔太君（農業土木科3年）、金光正浩君（園芸科学科3年）が奨励賞を受賞した。



【敬告】写真は、課題研究で取り組んでいた『週刊雑』の発行が、山陽新聞社の記者の目にとまり、取材を受けた時のもの。右が岡田裕貴君、左が中川勇希君。ともに畜産科学科の3年生である。現在、『週刊雑』は、2年生（5人）にバトンタッチされている。編集長を務める2年杉井久美子さんは「頑張っていきたい」と話している。

【農場】1月31日・学びのコーポレーション事業・生物工学科で2年生が倉敷芸術科学大学の生命科学部健康科学科・高橋康輝先生から「調養」をしていただきました。

「ホルム」の語源は、刺激するとか呼び覚ますということと、微量な化学物質だということ。ホルチゾール・エンドレフィン・アドレナリンなど。体の中には「勉強したい」というホルモンがあるのかと思うくらい生徒は真剣であった。



園芸科学科温室で
見つけたラン。パ
フィオペディラ
ム。原産地は東南
アジアからイン
ド。

【ホームルーム】トリノ五輪が終わろうとしている。0・05秒差、失格など色々な場面が交錯する。しかし、これまで耐えてきていただけにフィギュアスケート女子の荒川静香の金は素直にうれし。以前読んだ本に「愛国心」という言葉には、2種類の考えが流れ込んでいくとあった。一つは「ナショナリズム」。他国のことはどうでもいいから、自国の利益のみを追求するという思想。もう一方、英語で言うところの「パトリオティズム」(祖国愛)。自国の文化、伝統、情緒、自然といったものをこよなく愛することだそう。今度のオリンピックでフィギュアスケートペアで7位になった米国の井上怜奈選手(父の死、自身のガンという試練を乗り越えて出場)の精神力は想像を絶する。米国代表だったけれどこのペアを応援した日本人は多かっただろう。このことをパトリオティズムで説明してしまうのは少し強引かもしれないが、やはり頑張っている人に拍手を送りたくなるのだらう。さて、3月1日、本校は一・七回目の卒業式を迎える。百八十六名に拍手を送らう。